

第三幕第一場

シラノ、クリスチャン、ル・ブレ登場。

ル・ブレ ドイツで始まった戦火は燃え広がり、フランスも参戦。シラノ、クリスチャン、そしてわたしル・ブレも従軍し、闘いました。名高いアラスの包囲戦です。そんなある日、なんと幌馬車で敵陣を突破して、ロクサーヌがクリスチャンに会いに来てしまったのです。なんという無理のある展開でしょう。

ロクサーヌとラグノー、走って登場。ラグノーは大きな紙袋を提げている。

ロクサーヌ (クリスチャンに飛びつく) あなた！ 会いたかったわ！

クリスチャン ロクサーヌ！ どうしたんだ？

こんな恐ろしい道を通って、ぼくに
会いに来るなんて？

ロクサーヌ だって、妻ですもの！

全員 妻？！

クリスチャン (ぼくたち) 結婚したっけ？

ロクサーヌ ええ。

クリスチャン いつ？

ロクサーヌ うーん。(考える)

クリスチャン そんなシーンやった？ 飛ばしてない？

助手が台本を持って駆けこんでくる。皆、台本をめくる。

ル・ブレ あっ。

ロクサーヌ 飛ばしてた。

間。

シラノとクリスチャンとル・ブレ、ロクサーヌにハリセンを見舞う。

ロクサーヌ (輝くような笑顔で) 続けましょう！

クリスチャン ちょっと待って！ なんでそんな大事なシーン飛ばすの？！

ロクサーヌ しょうがないじゃない、もう話がここまで来ちゃったんだもん。

クリスチャン だけど、結婚だよ？ (ロクサーヌと自分を交互に指し) 結婚。

ラグノー まあまあ、このさい、個人的な感情は抜きにして。

クリスチャン そうじゃなくて、話の順番が…… (気がついて) きみ、なんでここにいるの。

ラグノー (にこにこ) 幌馬車、運転してきました。わたし、めでたく破産して、ロクサーヌさまの付き人になっちゃいましたから。

クリスチャン ああそうか。

ラグノー (紙袋をシラノに渡し) それから、これ、皆さんへの差し入れです。

全員 差し入れ？

ラグノー はい。目黒区の山本さんからです。

シラノ (紙袋についての付箋を確かめ) ホントだ。(客席に紙袋を掲げて見せ) 目黒区の山本さんからいただきましたー。山本さん、ありがとうございます！(ラグノーに) 中身、何？

ラグノー 文明堂の、おやつカステラです。

シラノ (客席に紙袋を掲げて見せ) 文明堂のおやつカステラですー！(ラグノーに) じゃ、おれたち、あっち(楽屋)でいただくか。

ラグノー はい！

ル・ブレ おれもそっち行く。

ロクサーヌ ずるーい！ あたしもそっち行く！

ピアニストも立って行く。

シラノ (クリスチャンに) じゃ、あとよろしく。

つまり、クリスチャン以外、全員「そっち」側に行った。

クリスチャン なんてこうなるの！！

全員 ……

クリスチャン あのね、クリスチャン、ここ、見せ場なの。数少ない見せ場なの。ここ取ったら、ホントいいとこないの。だからやらせて。お願い。お願い！(土下座)

シラノ (もったいぶって) まあ、きみがそこまで言うのなら……

クリスチャン (キレて) やらんかい！！

シラノ はーい。

ル・ブレ 結婚は？

クリスチャン 結婚？ した。たぶんした。

ル・ブレ たぶん？

クリスチャン ぜったいした！！

各自、もとの位置に着く。クリスチャン、場面を再開しようとするが、

クリスチャン ……どこまで行ったか、忘れちゃったよ。

ロクサーヌ あたしも。

ラグノー 「クリスチャン！」「ロクサーヌ！」ってどこじゃないですか？

クリスチャン ああそうか。(気がついて) いちばん最初じゃない。

ラグノー (にこにこと) ですね。

クリスチャン (いまひとつ納得できないまま) じゃ、最初からね。

クリスチャン、自分でひとつパン！と手をたたき、再開する。

テキトーに変えていいです。

テキトーに変えていいです。

ピアニストもピアノのところに戻る。

ロクサーヌ クリスチャン！

クリスチャン ロクサーヌ！ どうしたんだ？

こんな恐ろしい道を通って、ぼくに
会いに来るなんて？

ロクサーヌ お手紙のせい！

クリスチャン 手紙の？

ロクサーヌ このひと月というもの、
幾たびおたよりをいただきましたことか！

クリスチャン 書いてませんよ？

ロクサーヌ またまた～。

クリスチャン はっ！ まさか、シラノのやつ、おれの代わりに……！

クリスチャン、ふり向くと、すぐ後ろにいるシラノと目が合う。

クリスチャン いや、これ、まずいでしょ。

シラノ え？

クリスチャン あなたここにいちやまずいでしょ。いないはずでしょ。

シラノ ああ。(一步だけ脇へ寄る)

クリスチャン だからこれじゃぜんぜんダメでしょ！ もう！ 寄ってて、寄ってて。
いない人、いない人。(とシラノを押していき、ル・ブレに) あなたもなんでここにい
るの。

ル・ブレ いや、だって、(舞台と楽屋を交互に指し) はけるタイミングがなかった。

クリスチャン ああもう、どうするよこれ。(と悩み) よし！ こうしよう。(ル・ブレ
に両腕を広げさせ、シラノの横に立たせる) ちょっとしばらく、テントやってて。

ル・ブレ テ、テント？

クリスチャン そう、テント。シラノはね、ロクサーヌとクリスチャンの会話聞いてな
いことになってるの。だからテントがさえぎってるって設定にしてて。ね。(ロクサー
ヌのほうに向きなおり、台詞のつづきを言おうとする)

ル・ブレ 古いテント？ 新しいテント？

クリスチャン (ル・ブレのほうに向きなおり) いいの、どっちでも。テントなんだか
ら、役作りとかしなくていいの。(ロクサーヌのほうに向きなおり、台詞のつづきを言
おうとする)

ル・ブレ 何色のテント？

クリスチャン (ル・ブレのほうに向きなおり) ああもう…… (テキトーに) じゃ、古
くて黄色のテント。

ル・ブレ わかった。(自分に言い聞かせる) 古くて黄色のテントね……古くて黄色のテ
ント……

ル・ブレ、古くて黄色のテントになりきろうと努力する。

クリスチャン ロクサーヌ！

ロクサーヌ はい！

クリスチャン どこまでやりましたっけ？

ロクサーヌ お手紙の話ですわ。

クリスチャン ああそうか。

ロクサーヌ このひと月というもの、
幾たびおたよりをいただきましたことか！

クリスチャン そんなにたくさん？

ロクサーヌ ええ。

クリスチャン 週に何通？

ロクサーヌ 毎日、二通ですわ！

クリスチャン (傍白) くっ、シラノのやつ！
(ロクサーヌに) あんなくだらないうちの手紙！

ロクサーヌ そんなことおっしゃってはいや！
あなたに夢中になりました、そうですわ、いつぞやの晩、
窓の下で、聞いたこともないあなたのお声が、お心の
底の底まで打ち明けてくださった、あの時から……
それでね、あなたのお手紙は、このひと月、絶えることなく、
あなたのお声を、そう、あの夜に、あなたを包んだ甘く切ない、
あのお声を聞かせてくれる想いがして！ ごめんなさい、
もう矢も盾 [たて] もたまらずに！

クリスチャン しかし……

ロクサーヌ 読みました、読み返しました、幾たびも、魂までも
あくがれ出 [いで] て、あなたのもとに。あのお手紙はそのままに、
あなたを包む花びら、それが一ひら一ひらと、舞い降りたもの。
燃ゆる玉章 [たまざさ] の一言一言に、激しく嘘偽りのない
愛の想いがひしひしと……

クリスチャン 嘘偽りのない激しい愛？
本当にそれが、感じられる？

ロクサーヌ 感じられますとも、本当に！

クリスチャン それで、あなたは、ここまで来た！

ロクサーヌ まいりましたわ、ああ、愛しいクリスチャン！
おわびを申し上げにね——初めはただ、うわべだけ、
あなたがきれいなお顔だから、好きになったなどというご無礼を！

クリスチャン (愕然として) なんということ！

ロクサーヌ いまはただ、あなたの魂を、わたくしは愛しております。
形より中身ですわ！ 顔なんてどうでもいいのです、
もう、顔なんて、なくてもいい！

クリスチャン ないと困るでしょう。

ロクサーヌ たしかに、あると便利ですけど！

クリスチャン いや、便利とかそういうことじゃ……

ロクサーヌ かまいませんわ、たとえばあなたがどんなにブサイクだったとしても！

クリスチャン やめてくれ！

ロクサーヌ ブッサブサのヘチャムクレのポンポコピーだったとしても！

クリスチャン やめんかい！！

ロクサーヌ まあ、なぜ？

クリスチャン 顔だけがとりえの男に、顔なんかどうでもいいって、それは、それは、死ねってことだよな？

ロクサーヌ そうなるかしら？

クリスチャン わああ……（撃沈）

ロクサーヌ でも、あなたは、顔だけがとりえの男なんかじゃありませんわ。あのお手紙！ あの情熱！ あの真心！……どうなさったの？

クリスチャン なんでもない。ちょっと用事が……すぐ終わります。

クリスチャン、テント（＝ル・ブレの腕）をまくってシラノのそばへ。

クリスチャン シラノ！

シラノ どうした、青い顔して？

クリスチャン あの人はおれを愛していない。

シラノ なんだって？

クリスチャン あの人が愛しているのはきみだ！

シラノ 何を言う！

クリスチャン 顔なんか関係ないって。形より中身だって。

シラノ そう言われたのか？

クリスチャン うん。

だからあの人を愛しているのはきみだ。きみも愛している、あの人を！

シラノ おれが？

クリスチャン わかっているんだ。

シラノ どうして。

クリスチャン 手紙、書きすぎでしょう。

シラノ バレた？

クリスチャン （シラノの腕をつかみ）選んでもらおう、おれたちのどちらかを。

シラノ （抵抗する）落ちつけ！

クリスチャン いやなんだ、こんな中途半端は！

おれは愛されたいんだ、おれ自身として、そうでないなら、

愛されないほうがいい！！

クリスチャン、決める。

間。

クリスチャン、さりげなく、皆に拍手を求める。

皆、だんだん気づいて、やがて大きな拍手。

クリスチャン （皆に）ありがとう、どうもありがとう。（シラノに）で、このあと、ク

テキトーに変えていいです。

ル・ブレは拍手してから律儀にテントに戻る。

リスチャンってどうなるんだっけ？

シラノ 敵陣に向かって走り出して行って、弾に当たってあっさり死ぬんだよ。

クリスチャン つくづく不憫なやつだな。

シラノ ね。

ル・ブレ (腕を上げたまま) ねえ、まだ(このまま)？

クリスチャン あ、ありがと、もういいよ。(ル・ブレ、腕を下ろす。クリスチャン、いざ走り出そうとして、ためらい、ふり返って他の4人に向かい) あのね、このままだと走り出しにくいから、後ろから「クリスチャン！」って声かけてくれる？

シラノ わかった。誰がかける？ おれ？

ル・ブレ え、おれ？

ロクサーヌ え、あたし？

ラグノー え、わたし？

クリスチャン もう……じゃ、みんなでかけてよ。

シラノ わかった。せーの、

全員 クリスチャーン！

助手も。

音楽。

クリスチャン、走り出し、と言ってもせいぜい数歩走ったところで、弾に当たって死ぬ——という、渾身の演技。

音楽やむ。

#15 リスト「ハンガリア
狂詩曲2番」冒頭

ロクサーヌ え……これでおしまい？

シラノ&ル・ブレ&ラグノー (重々しくうなづく)

ロクサーヌ ウソ。これだけ？ クリスチャン、これで死んじゃうの……？ (クリスチャンのそばにひざまずき、彼の体を揺さぶる) ねえ、こんなのってあんまりじゃない？ ねえ。ねえったら……！

転換。

第三幕第二場

音楽。

以降は、もはや付け鼻なしで演じられる。

喪服姿のロクサーヌ、進み出る。胸に小さな守り袋を提げている。

#16 フランク「前奏曲、
フーガと変奏曲」よりフ
ーガ

ロクサーヌ アラスの戦いから14年。わたくしロクサーヌは修道院にこもり、亡き夫クリスチャンの魂のために、毎日祈りを捧げています。

世間からすっかり遠ざかってしまったわたくしの、たった一つの楽しみは、週に一度の、あの方の訪れ。

シラノ、帽子を深くかぶり、重い足取りで登場、ロクサーヌの背後に立つ。

ロクサーヌ 枯れ葉が……散りますね。

シラノ 散りますな。美しい。

ロクサーヌ (微笑み、ふり向かずに) 14年間で初めての遅刻ですわね、シラノさま。

シラノ (やはり微笑み、静かに) アラスの古傷が、痛みましてね。

夕暮れが迫ってくる。

ロクサーヌ 古傷は、同じこと。わたくしにもありますわ。

(胸の守り袋に手を当て) ここに、黄ばんでいくお手紙の上に、
今もなお、涙と血の跡がにじんでいます。

シラノ 彼の手紙ですか。

ロクサーヌ ええ。お読みになりたい？ (手紙を渡す)

シラノ (それを受けとり) いいのですか？

ロクサーヌ どうぞ……！

シラノ、腰を下ろし、静かに声に出して手紙を読み始める。

シラノ 「ロクサーヌよ、さらば、わたしはこれから死ぬ。

目に浮かぶ、あなたの姿、額にふと手を当てるなつかしいしぐさ、
かなうことなら、声をかぎりに叫びたい……」

ロクサーヌ (はっとして) このお声は？

シラノ (読み続けて) 「……叫びたい、さらば！——と。
大切なひと、わたしの宝物。」

ロクサーヌ このお声は……

シラノ 「わたしの愛……！」

ロクサーヌ このお声は、
まさか、あの夜の……！

ロクサーヌ、ふり向いて、シラノを見る。

シラノはもはや読んではいず、目を閉じて、暗唱している。

シラノ 「わたしの心は、つかのまも、あなたを離れたことはなく、
この世でも、あの世でも、ただひたすらに愛しつづけ、
ただひたすらに……」

ロクサーヌ (そっと肩に手を置き) どうしてご存知ですか？ このお手紙の中身を。

沈黙。

ロクサーヌ あなただったのね。

シラノ ちがいます。

ロクサーヌ あのお手紙の数々……あなただった。

シラノ ちがいます。

ロクサーヌ あの夜のお声も！

シラノ ちがう、わたしではない！

ロクサーヌ どうして黙っておいででしたの、今まで！
あの方は、このお手紙とはなんのかかわりもなかった、
涙の跡も、あなたの涙……

シラノ (手紙をさし出して) 血の跡は、彼の血です。

ロクサーヌ それなら、なぜ今日という日になって、
この大切な沈黙を、お破りになったの？

シラノ それは……

ル・ブレとラグノーが駆けこんでくる。

ル・ブレ やっぱりそうだ、

ここにいた。軽はずみにも程があるぞ！

シラノ (笑いながら、立ちあがろうとして) なんだ、大げさな。

ル・ブレ 起き上がったら、命が危ない！

ロクサーヌ なんですって！

シラノ そう、本日土曜日、26日、晚餐に先立つこと1時間、
ムッシュー・シラノ・ド・ベルジュラック、暗殺される。

シラノ、帽子を取る。頭に包帯が巻かれている。

ロクサーヌ どうして……？ シラノさま！

シラノ 「討たれるならば名誉の剣、

胸に受けるは勇者の切っ先！」

そう言ったはずだぞ、おれは。運命は意地が悪いな。

ごらんとおり、後ろから、ガツンとやられてこのざまだ。

ロクサーヌ (泣きながら) いや、こんなのいや……！

ル・ブレ (涙ぐんで) 偶然にしてはできすぎているんだ、
なんて卑劣な！ 窓が開いて、彼が下を通りかかったとき、
上から、材木が落ちてきた。

ロクサーヌ (泣きながら) ここ、笑うところ？

ル・ブレ (涙ぐんで) いや、たぶんちがう。

シラノ おれだってまぬけな話だと思うよ、

だけど実話だから、しょうがない。

ロクサーヌ (泣きながら) そうなの？

シラノ うん。

ル・ブレ (涙ぐんで) 誰のしわざだ、何の恨みだ！ 心当たりは？

シラノ ありすぎて誰だかわからん。

ル・ブレ&ロクサーヌ&ラグノー やっぱり。

ロクサーヌ (泣きながら) でも納得できない、この展開。

ル・ブレ (涙ぐんで) 無理があるよ。

シラノ ね。

ル・ブレ (涙ぐんで) なんで頭に致命傷を受けてからここまで歩いてきて、しかもえんえんとしゃべってられるの。

シラノ このあと立ちあがって、剣を抜いて、死神の幻と戦うことになってるよ。

ル・ブレ (ついに泣き出す) ぜったい無理でしょー。

ロクサーヌ (泣きながら) そういうことじゃなくて、ロクサーヌがバカすぎるー。

シラノ だよね。

ロクサーヌ (泣きながら) ふつう、もっと早く気がつくー。

シラノ だよね。

ロクサーヌ (泣きながら) そうよー。

ラグノー 先生ー! (号泣)

シラノ 泣くな、ラグノー。傷にひびくよ。

最近、どうしてる? ロクサーヌにひまを出されてから。

ラグノー (泣きながら) モリエールさんの劇団に、拾ってもらいました。

シラノ モリエールか! なつかしいな。元気か、やつは?

ラグノー (泣きながら) はい。「シラノ先輩によろしく」とおっしゃってました。

モリエールさん、シラノ先生のこと、大好きなんです。

シラノ うーん、好きすぎて、おれの書いた芝居の1 [ワン] シーン、パクったからな。

ラグノー 『スカパンの悪だくみ』、第二幕第七場ですよ。

シラノ 受けたか?

ラグノー そりゃもう、お客さんは、ドッカンドッカン!

シラノ だろうな。

それでいいんだ。おれの人生は、他人に台詞を付ける役だった。

あとは、忘れ去られる。

ラグノー 先生ー!! (号泣)

シラノ 泣くなったら。しかたないよ、まだ、著作権保護とかない時代なんだから。

ラグノー (泣きながら) ですね。

シラノ ところでおまえ、モリエールのところで何してるんだ?

ラグノー (泣きながら) 雑用係です。ざっちゃんです。

シラノ ざっちゃんか。

ラグノー (泣きながら) ざっちゃんです。

ロスタン、静かに、ゆっくりとした足どりで登場。

ロスタン 台詞がちがうぞ、シラノ。

「わかっている。おれはすべてに失敗した、死ぬ時まで」、だろう。

なぜ言わない。見せ場じゃないか。

シラノ そうか?

ロスタン 「だが、勝つ望みがあるときばかり、戦うのとはわけがちがうぞ。

そうとも！ 負けると知って戦うのが、はるかに美しいのだ！」

名台詞じゃないか。

シラノ そうか？

ロスタン 気に入らないか。

シラノ (微笑んで) しっくり来ないね。

ロスタン どうして。

シラノ 言うわけないだろう、シラノが、このおれが、そんな泣きごと。

たかが人生、勝ちも負けも、成功も失敗もあるか。

小さいんだよ、エドモン・ロスタン、あんたの話は。

月から見れば(指で示す)このくらいだ。――

おれは頭をなぐられてから、半年苦しんで死んだ。

ぼろぼろのシーツの上でね。最期をみとってくれたのは従妹のマドレーヌだった、

美女でも才女でもなかったが、おれを墓におさめてくれた。

それにル・ブレとラグノー。寂しい葬式だったな。

やつらにおれが残してやれたのも、一束の原稿だけだった。

しかも、金にならない。

ル・ブレ すまない、シラノ。おれはあの原稿に手を入れた。

シラノ わかっている。

ル・ブレ あれを持つてるだけで、おれまでお上に追い回されそうだったんだ。

危ないところを全部削って、なんとか出版した――

(ロスタンに) あんたが読んだのはそれだよ、毒を抜かれたおとぎ話だ。

ロスタン (微笑む) そうらしいな。

ル・ブレ 許してくれ、シラノ。

シラノ 許すどころか、感謝している。

ル・ブレ 感謝？

シラノ だっておまえのおかげで、ともかくもおれの本は生きのびたじゃないか。

(ロスタンを指し) こいつの時代にいたるまで。

ロスタン おれも感謝しないと。

シラノ そいつはまだ早い。

いいことを教えてやろうか。1921年、

あんたが死んで3年後に、ル・ブレが削る前のおれの原稿が、

パリで発見された。

ロスタン そうなのか？！

シラノ あんたが知らなかった部分を読んでやるから、聞け。(目を閉じて暗唱する)

「なぜ神は姿を現わさないのか。なぜ神はかくれんぼをし、『いないいないばあ』をしているのか。もしもわたしに神が見えないとしたら、悪いのはわたしをそんなバカにつくった神のほうではないか――」

全員 (息をのんで聞き入っている)

シラノ 「――と、月の魔神がとんでもなく罰あたりなことを言うので、わたしはたまげてしまった。」

ロスタン おい！

シラノ (笑う)

ロスタン おまえの話を聞いていると、何が本当なのかわからなくなる。

シラノ 本当も嘘もない、あるのは物語だけだ。この世に英雄などいない、おれたちはみんな星屑の上の砂粒だ。——ついでに言うとおれは、おれがさんざんおちよくったにもかかわらず、おれの原稿をちゃんと取っておいてくれた神ってお方にも、ほんのちょっとばかり、感謝している。

あたたかな音楽。

シラノ これでいいんだ。おれは笑って死んだ、死ぬときまでも。

ロスタン そう来たか！

シラノ 「歌って、夢見て、

シラノ&ロスタン 「笑って、死ぬ！

ロスタン 「いつでもひとり——

シラノ 「いつでも自由だ」。あの一行だけは悪くないな。

ロスタン メルシー。

ロクサーヌ (泣きながら) シラノ……！

シラノ 泣くな、ロクサーヌ。

ロクサーヌ (泣きながら) ロクサーヌも、いたってことにしていい？ 美女でも才女でもなかったかもしれないけど、シラノが死ぬとき、そばで泣いてたってことにしていい？

シラノ いいか、ロクサーヌ。たしかに、きみが実在したという証拠は残っていない。だが、だからって、きみが実在しなかったという証明にはならないんだ、わかるかい。きみは、いた。いまもいる。(ロスタンを指し) こいつの書いたオハナシの中で、いつも、おれのそばに。そうだろう？

ロクサーヌ (嬉し泣き) シラノ！

シラノ ロクサーヌ、覚えているかい。きみはあの太陽系のもうひとつの焦点だ。

何もないけど、何かがある。いや、何もないから、何かがある。

きみはいない、だからこそ、きみは輝く、

きみをめぐっておれたちの物語は回転するのだから。

ロスタン (微笑む) それで、すべてがしっくり行く。

ル・ブレ そうだな。納得できる。

ラグノー ですね。

シラノ、立ち上がる。他の4人、シラノを囲んで立つ。

シラノ (はらかな月を指し) あそこ、おれの月の上では、「さよなら」は言わないことになっている。別れ際にはこう言うんだ、「では友よ、いつの日も、自由でありたまえ！」とね。だからおれたちも言おうじゃないか、いま、ここで。さあ。

全員 では友よ、いつの日も自由でありたまえ……！

#17=01 セヴラック「教会のスイス人に扮装したトト」

シラノ、逝く。
感動的な音楽のうちに、照明落ちて――
落ちきる前に、

シラノ (あっさり) はい、じゃどうもお疲れさまでしたー。

シラノ、ロクサーヌ、ル・ブレ、ラグノー、ピアニスト、やれやれという感じで
帰りじたくを始める。

ロスタン ちょっと待ってよ。これでおしまい？

シラノ&ロクサーヌ&ル・ブレ&ラグノー うん。

ロスタン それはないでしょ！ だってあれやってないよ、わたしの書いた感動のラストシーン。

シラノ 残念でした。これ、おれの芝居だもんね。当然おれの書いた文章で終わるの。

ロスタン えーっ、でも『シラノ』と言えばあれやらなきゃ、お客さまも納得できないでしょ？

シラノ あー、お客さまをダシにするのずるいんだ、ずるいんだ。

ロクサーヌ あれってどういふの？

ロスタン あれですよ。(照明家に向かって) 照明さん、ちょっとお願いできますか？ (ピアニストに) 音楽さんも。

悲劇のラストシーンにふさわしい、哀感に満ちた音楽と照明。

ロスタン (シラノの帽子を被り) 来い！ 死神め！

おれからすべてを奪おうと言うのだな、名誉の月桂冠も、愛の薔薇も！

さあ、取れ、取るがいい！ それでもおれにはひとつあるぞ、

今宵、神の門をくぐるときに引っさげていくものが――

シラノ (ロスタンから帽子を受けとって)

天の蒼 [あお] い敷居を、ひろびろと、晴れ晴れと吹きはらって、

しわ一つ、しみ一つつけないままでおれは持っていく、

それは……

ロクサーヌ それは？

ル・ブレ それは？

ラグノー それは？

シラノ それはおれの、心意気だ！

シラノ、逝く。

溶暗――

落ちきる前に、

ピアニストもうなずく。

#18 セヴラック「ミミは
侯爵婦人の扮装をする」
(短調部分)

ロスタン ——っていうのをやってほしいんですよ。(照明家とピアニストに) あ、どうも、ありがとうございますー。

ロクサーヌ たしかに感動的ね。

ロスタン (ロクサーヌに) でしょ? (シラノに) ほら。

ロクサーヌ (わくわく) じゃ、これ、やりましょうよ。

ラグノー でも、いま、もうやっちゃいましたよね?

間。

シラノ ここはやっぱりおれの小説を朗読して、しめることにしようよ。

ロスタン わたしのラストシーンじゃないと終わりにならないですよ。

シラノ おれのでしょう。

ロスタン わたしのでしょう。

シラノ おれの!

ロスタン わたしの!

ル・ブレ あのね。

シラノ&ロスタン 何?

ル・ブレ 早く終わりにしないと、飲みに行けないよ?

ロスタン それ、最優先事項なの?!

シラノ&ル・ブレ&ロクサーヌ&ラグノー (断固として) うん。

ロスタン そんな…… (撃沈)

シラノ いいじゃないか、ロスタンさんよ、あんた、戯曲『シラノ』の大ヒット、500日ロングラン記録達成のおかげで勲章までもらったんじゃない、史上最年少のレジオン・ド・ヌール勲章、33歳で。ここくらい、ゆずりなさいよ。

ロスタン (泣く) だけど、みんなの記憶に残ってるの、シラノ、シラノってばかりでしょう。わたしの名前なんてだあーれも覚えてない。

シラノ ああもう、泣くなよ、めんどくさい人だな……

ロクサーヌ ねえ、どっちでもいいからさ、あれだけはやめてよね。

シラノ&ロスタン 何?

ロクサーヌ よくあるじゃない、最後に、こう、とってつけたように歌うたって、無理やり盛りあげて終わるの。

全員 (手を縦に振って) あるあるある!

ル・ブレ あれははずかしいね。

ラグノー 作者が書いてて收拾つかなくなっちゃったっていうのが見え見えですよ。

シラノ あれだけはさ、物書きとして、やっちゃいけないよね。

ロスタン だよ!

全員 ね~!!

音楽。

皆、つい、歌ってしまう。

#19=07 「歌うしかない
~フィナーレ」

全員 ここで突然 歌いだすのは
とても不自然 おかしいじゃない

助手 (登場して) だけど歌えば 心は晴れる
ここまで来たら 歌うしかない

カーテンコールになる。一人ずつ客席に礼。

全員 歌って夢見て 笑って死ぬ
人に頼らず いつでも自由
ハナも嵐も どんと来いだ
シラノの芝居——

助手 (台詞) これでおしまい？

全員 (手を横に振って) ノンノンノン！
シラノの芝居 永遠 [とわ] に続くよ！

シラノ (客席に向かって) メルシー・ボーキュー！

暗転。

——完——